

けいせいあわ なると

傾城阿波の鳴門

〔解説〕明和五年（一七六八）六月、竹本座初演。近松半二、竹本三郎兵衛、八民平七らの合作。夕霧伊佐衛門を題材にした近松門左衛門の「夕霧阿波鳴渡」をもとに、阿波徳島、玉木家のお家騒動を絡ませたものです。当時、阿波の浪人が、大坂玉造に仮住まいをして、詐欺・ゆすり・追いはぎなどを働いていた。ある日、順礼の子が、金を持っているのを知り、だまして家に連れ帰り、深夜しめ殺して、死体を畑へ埋めた。しかしこれが露見したため、召し捕られ、重罪に処せられた、という実説を取り入れています。

〔あらすじ〕阿波徳島玉木家の若殿が遊女におぼれているのに乗じて、悪家老の一味はお家横領を企てていました。同じく家老の桜井主膳はこの状態を憂えていたのですが、預かっていたお家の重宝「国次（くにつぐ）」の刀を盗まれてしまいます。この刀の探索の為、家臣十郎兵衛は、銀十郎と名を変えて、妻お弓とともに盗賊の仲間に入ります。〔順礼歌の段〕ある日、十郎兵衛の留守に、順礼の子が門口にやってきました。お弓は、話を聞くうちに、国元に残してきた娘のおつるとわかりますが、親子と名乗ると盗賊の罪が娘にかかることを恐れ、一旦は追い返します。しかし、今、別れてはもう二度と会うことが出来ないといい直し、おつるの跡を追います。

順礼歌の段

へふるさとを、遙々こゝに、紀三井寺。

「順礼に御報謝」

と、言ふも優しき国訛。

「テモしほらしい順礼衆、ドレドレ報謝進ぜう」

と、盆に白米の志、

「アイアイ、有がたうござります」

と、言ふ物腰から棲外れ、

「可愛らしい娘の子、定めて連れ衆は親御達、国は

いづく」

と尋ねられ、

「アイ、国は阿波の徳島でござります」

「何ぢや徳島、さつてもそれは、マア懐しい。わしが

生れも阿波の徳島、そして父様や母様と一緒に順礼

さんすのか」

「イエイエ、その父様や母様に逢ひたさ故、それで

わし一人、西国するのでござります」

と、聞いてどうやら気にかゝる、お弓は猶も傍に寄

り、

「ム、父様や母様に逢ひたさに、西国するとはど

うした訳ぢや、サそれが聞きたい、言ふて聞かしや

〜」

「アイ、どうした訳ぢや知らぬが、三つの年に父様

や母様も、わしを婆様に預けて、どこへやら往かし

やんしたげな。それでわたしは婆様の世話になつて

往たけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい、顔が見

たい。それで方々と、尋ねて歩くのでござります」

「ム、シテその親達の名は何というぞいの」

「アイ、父様の名は十郎兵衛、母様はお弓と申しま

す」

と、聞いて吃驚びくり、

「ア、コレコレ、アノ父様は十郎兵衛、母様はお弓、

三つの年別れて、婆様に育てられてゐたとは、疑ひもない我が娘」

と、見れば見る程幼顔、見覚えのある額ほくろの黒子、

「ヤレ我子か、懐しや」

と言はんとせしが、『待て暫し。夫婦は今も取らるゝ命、元より覚悟の身なれども、親子といはゞこの子にまで、どんな憂目がかゝらうやら、それを思へばなま中に、名乗り立てして憂目を見んより、名乗のらでこの儘帰すのが、かへつてこの子が為ならん』と、心を鎮め余所余所しく。

「オ、それはまあまあ、年端も行かぬに遙々の所を、よう尋ねに出さつしやつたのう。その親達が聞いて

なら、さぞ嬉しうて／＼飛立つ、サア、飛立つ様にあらうが、儘ならぬが世の憂きふし。身にも命にもかへて、可愛い子を振り捨て、国を立退く親御の心。よくよくの事であらう程に、酷い親と必ず必ず恨みぬがよいぞや」

「イエ／＼勿体ない、何の恨みませう。恨みる事はないけれど、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も覚えず、余所の子供衆が、母様に髪結うて貰うたり、夜は抱かれて寝やしやんすを見ると、わしも母様があるならあの様に髪結うて貰はうものと、羨やましうござんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい、ひよつと逢はれまいかと思へば、それが悲しうござんす」と、泣いぢやくりするいちらしさ、母は心も消え入る思ひ、

「さて／＼世の中に、親となり子と生るゝ程深い

縁はなけれどもナア、親が死んだり子が先立つたり、思ふ様にならぬが浮世、こなたもどれ程尋ねても、顔も所も知らぬ親達、逢はれぬ時は詮ない事。もう尋ねずと、国へ往んだがよいわいの」

「イエ〜、恋しい父様や母様、たとへいつ迄かゝつてなど、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は一人旅ぢやてゝ、何処の宿でも泊めてはくれず、野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては、た、た、叩かれたり。怖い事や悲しい事も、父様や母様と一所にゐたりや、こんな目には逢ふまい物を、何処にどうしてゐやしやんすぞ。逢ひたい事ぢや逢ひたい事ぢや、逢ひたい」

と、わつと泣き出す娘より、見る母親はたまり兼ね、
「オ、道理ぢや、可愛や、いぢらしや」

と、我を忘れて抱き付き、前後正体嘆きしが。『是程

親を慕ふ子を、何とこの儘去なされう。いつそ打ち明け名乗らうか、イヤ〜それではこの子も同じ罪、その時の悲しさを思ひ廻せば、去なすが為』と、

「オ、段々の様子を聞き、我が身の様に思はれて、悲しいとも情ないとも、言ふに言はれぬ事ながら、兎角命が物種。まめでさへありや、又逢はれまい物でもない。コレ、仕付けぬ旅に身を痛め、煩ひでも出りや悪い。何処をしやうどに尋ねうより、その婆様の方へ去んでゐるとノ、追付け父様や母様が逢ひに往てぢや程に、悪い事は言はぬ、悪い事は言はぬ、なんの又このおばが、わが身の為にならぬ事を言ふてよいものか、わが身の為にならぬ事を言ふてよいもの。思ひ直して、これから直ぐに国へ去んで、随分まめで親達の尋ねて行かしやるを待つてゐるのがよいぞや」

と、宥めすかすを聞き分けて、

「アイ／＼、忝なうござります。お前がその様に言ふて泣いて下さりますによつて、どうやら母様の様に思はれて、わしやこゝが去にとむない。申しお家様、どんな事なと致しませう程に、お前の御傍にいづ迄も、わたしを置いて下さりませ」

「エ、悲しい事を言ひ出して、又このおばを泣かすのか、泣かすのかいの。さつきにからわしもわが子、サア、わが子の様に思ふて、こゝに置きたい、去なしとむないと、様々思ひ廻せども、こゝに置いてはどうも為にならぬ事があるによつて、それでつれなふ去なすのぢや程にの、聞分けて去んだがよいぞや」と言ひつゝ内へ針箱の、底を探して豆板の、まめなを喜ぶ餞別と、紙に包んで持つて出で、

「コレ、何ぼ一人旅でも、たとと錢さへやりや泊め

る。わづかなれども志、この金を路銀にして、早う国へ去にや、ヤ、必ず／＼煩ふてばしたもんな」

と、金を渡せば押し戻し、

「アイ、嬉しうござんすれど、金は小判といふ物を、たとと持つてをります。そんなりやまうさんじます、忝なうござります」

と、泣く泣く立つを引きとどめ、無理に持たして塵打ち払ひ、

「コレ、もう去にやるか、名残りが惜しい、別れとむない、コレ、今一度顔を」

と引き寄せて、見れば見る程胸迫り、離れ難なき憂き思ひ、それと知らねど誠の血筋、名残り惜げに振り返り、

「どこをどうして尋ねたら、父様や母様に、逢はれる事ぞ、逢はしてたべ、南無大悲の観音様」

へ父母の、恵みも深き粉川寺

泣く泣く別れ行く跡を、見送り見送り延び上り、

「コレ娘、ま一度こちら向いても、ま一度こちら向いてたもいの。折角長の海山越え、艱難してあこがれ尋ぬるいとし子に、不思議と逢ひは逢ひながら、名乗らで退かす母が気は、どの様にあらうと思ふ、狂気半分、半分は死んでゐるわいの。まだ生い先のある子をば、親故路頭に立たすか」

と、その儘そこにどうと伏し、消え入るばかり嘆きしが。起き直つて涙を押へ、

「イヤイヤ、どう思ひ諦めても、今別れては又逢ふ事はならぬ身の上、たとへ難儀がかゝらばかゝれ、又その時は夫の思案、程は行くまい追付いて、連れて戻らう。さうじや、さうぢや」

と子に迷ふ、道は親子の別れ道、後を慕うて

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承下さい。